

5 地域社会と文化

活発化する地域活動

●地域に根づく市民文化

市が把握している文化団体は、音楽、芸術、演劇、文芸、伝統芸能等約四百近くある。主なものとしては、県立音楽堂で毎月演奏会を行っている横浜交響楽団、スカイ劇場で毎月公演している横浜アマチュア演劇連盟加盟の各劇団などがある。

横浜美術協会主催のハマ展は春と秋に市民ギャラリーで開かれ、応募者数、観客数とも毎年着実に伸びている。そのほか市で共催しているものは、二〇事業にもなっている。こうした全市的事业以外にも多くの団体が、独自にそれぞれの地域に根ざした文化活動を行っており、その活発な活

動状況は、教育委員会へそのつど申請される名義後援件数の増加からも明らかである(表4—39)。

●伸びゆく体育活動

横浜市体育協会に所属している各種スポーツ協会(バトミントン協会等)は三十三ある。市民で横浜市体育協会に登録している人は、昭和五〇年には九万五千人、五一年には九万八千人、五二年に

表4—39 過去3か年分野別名義後援件数

年度	分野	書道	美術	音楽	文芸	演劇・バレエ	映画鑑賞	その他	合計
51		31	31	29	8	3	27	10	139
52		31	27	33	4	9	24	14	142
53 (54.1.31現在)		31	28	43	6	3	22	20	153

〔資料〕 教育委員会

は九万九千人、五三年は一〇万一千人と毎年増加している。最も登録者の多いのは、野球連盟の四万二千人、次が剣道連盟の一万八千人、その次がサッカー協会の九千人である。最近伸び率の高いものとしては、バレーボール、ソフトボール、卓球、体操などがあげられる。登録していない人びとのスポーツ活動も、体育施設に対する強い要望や施設の利用状況などから年々活発になっていくものと考えられる。

こうした近年の体育活動、とりわけ一般市民の行う社会体育の発展に対応して、施設の整備、活動に対する指導などの施策の充実が望まれている。

● 育つボランティア活動

地域社会での市民生活は、さまざまな分野にまたがっており、市民生活を安定させ、豊かなものにしていくためには、市民相互間の助け合いというものが必要になってくる。そこで、市内のボランティア活動のいくつかを紹介してみたい。

—— 横浜ボランティア協会の活動 ——

青少年のすこやかな成長をめざして、昭和四九年に横浜ボランティア協会が設立された。水泳、キャンプ、児童文

化祭、新聞づくり等の地域でのさまざまな活動に対し、ボランティア・講師を派遣している。最近では、ハンディキヤップ児の水泳や体操に対するボランティアの派遣が増えている。活動するボランティアの数も年々増加し、五三年三月には二、一二八名に達しているが、ボランティア協会は、さらに多くの市民の参加を期待している。このように、ボランティア活動は地域から育ってきつつあるが、市民の自主的活動—ボランティア活動—が市民生活の一部となるとき、たときこそ、地方自治の精神に根ざしたあるべき地域社会が見いだされるのではないだろうか。

ボランティア活動



——ヨコハマさわやか運動——

横浜をだれにも誇れる清潔であたたかみのある街にするため、ヨコハマさわやか運動が各地域で展開されている。

この運動は、町を市民と行政が一体となつてきれいにすることによって、市民相互の連帯感を育成しようとするものである。各自治会、町内会、各種市民団体、行政機関などによって市本部、各区本部が構成され、広報活動、キャンペーン、清掃活動等を行っている。

中区の例では、レター作戦（山下町・関内地区の事業所にハガキを出す）を実施し、商店、事業所の意識の啓発を行っている。中区に多い河川の沿岸環境美化事業を進め、河と街が一带となった街の美しさをめざしている。また、老人クラブ、婦人団体、商店街、自治会、ボランティアよりなる「さわやか部隊」を編成し、区内の主要箇所清掃で定期的に

中区のレター



ノイボイてさわやかな街に……



ヨコハマさわやか運動

活動を行っている。こうした活動を通して市民が街を愛するようになり、市民意識の形成がはかれることが期待されている。

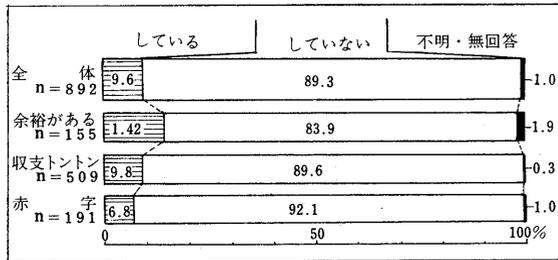
●発展するヨコハマ文化

ヨコハマには共通のイメージがある。港、海、丘、異国のおい、ハイカラ文化などがそれである。この共通イメージのもとに活力に富んだ市民がいる。横浜文化の伝統を受けついできた市民に加えて、日本の各地からその地域の文化を身につけて新しく仲間入りした市民もいる。これらの市民がとけあい、豊かな、市民文化の確立へと向いつつあるといえよう。特徴ある文化が形成されるためには、文化が生れ育つ社会の大きさも必要である。ヨコハマは日本第二位の人口をかかえる都市であり、人口の定着化とともに地域社会が形づくられつつあり、ヨコハマのイメージ、市民の活力、都市の大きさは、ヨコハマ文化の形成にとって有利な条件ともいえる。そこで、これらをいかしてヨコハマ文化を育てていくために、市では五四年度に、文化関係の各界の識者の意見や提言をもとに多様な文化の創造への足がかりをつかもうとしている。

表4—40 市内常用労働者の給与、労働時間の経年変化

	46	47	48	49	50	51
月平均給与(千円)	92	107	130	167	188	216
総労働時間数 (時間/月)	184	183	181	175	170	174
出勤日数(日/月)	22.3	22.1	21.8	21.3	21.1	21.3

図4—46 暮らしむきからみた地域活動



●地域活動を活性化させるもの

文化活動、体育活動、ボランティア活動等の地域活動は年々活発になってきている。これは所得の増大、労働時間の減少、出勤日数の減少(休日の増加)と密接な関係をもっていると考えられる。

このことは、生活のゆとりが地域活動への参加と関係を

表4—43 休日形態別多様性

休日形態	多様性		n (実数)
	月間	年間	
週休2日	土・日が週休	4.0 5.9	81
	その他	3.9 6.5	13
隔週、月一度週休2日	土・日が週休	4.5 6.4	100
	その他	3.7 5.7	13
週休1日	日曜が休み	3.5 5.3	134
	その他	3.3 4.9	27
月単位で休みが決まっている人	月に4日以上休み	3.5 5.0	26
	月に3日休み	3.0 5.0	10
	月に2日以下休み	3.4 4.9	8
その他	3.5 5.1	70	
不明・無回答	3.7 5.5	24	

表4—41 学歴別多様性

学歴	多様性	n(実数)
小・中学校卒	2.7	271
高校卒	3.8	393
大学卒	4.2	211

表4—42 暮らし向き別多様性

暮らし向き	多様性	n(実数)
余裕あり	4.1	155
収支トントン	3.5	509
赤字	3.2	191
不明・無回答	3.3	37

横浜市民の生活構造 51年11月

「多様性とは36頁の図3—4に表示されている12の余暇行動のうち行った行動の数」

もっていることから説明される(図4-46)。さらには、高学歴化、生活の安定化、休日の増大が余暇活動の多様化をもたらしている(表4-40、43)。

市民の意向調査(三四頁・図3-3)によると今後行いたい余暇活動としては、一位がスポーツ・日帰り行楽・ドライブ、二位がスポーツ見物・映画・音楽会・三位が読書、四位が家族との団らん、五位がショッピングである。

今後の新しい余暇活動の要望に対応して、多様な機能をもった市民利用施設が必要となってくる。現在では社会活動や趣味の会への参加意欲をもった人の約三割が市民利用施設を利用しており、今後の利用意向は六割にもなっている。これからも今後の施設に対する要望の強いことが予想される。

●整備される市民利用施設

現在横浜市で行っている文化体育行政としては、施設の整備・管理、研修会の実施、広報活動、各種事業の共催・後援、文化財の保護等広範囲なものとなっている。ここでは、市民文化・コミュニティの形成、社会体育の発展をめざして近年整備されてきた市民利用施設を紹介したい。

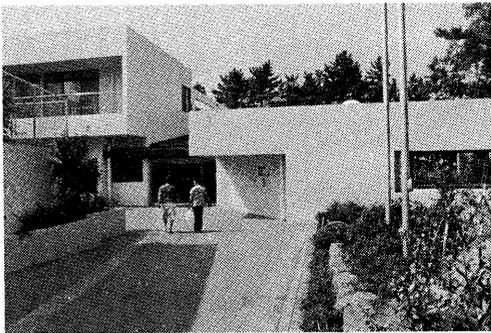
——地区センター——

多目的施設である地区センターは、昭和四八年五月に旭区希望が丘にはじめて完成した。その後、本郷地区センター、磯子地区センター、山内地区センター、日吉地区センター、戸塚地区センター、南地区センターが開設している。さらに、港南区、瀬谷区、鶴見区、保土ヶ谷区、神奈川区、金沢区にも建設が予定されている。

利用状況を見ると、一日平均利用者(昭和五二年度実績)

は、希望が丘地区センターの二五〇人から磯子地区センターの四二〇人であり、すべての利用申込みには応じきれないのが現状である。男女別の利用状況を見ると、女性の利用率が四五〜六〇%とやや高く、また階層別には、主婦が二一%、

日吉地区センター



三八%、小中学生が三四%、五〇%と両者で大部分を占めている。利用者の居住地域をみると区内の人が七八%、九七%で、立地条件によつて異なるものの、ほぼそれぞれの区域をサービス地域としている。

地区センターは地域活動の拠点、交流の場として地域に設けられたもので、住民の自主的活動の場として利用されることが望ましい。したがつて、運営管理についても地域の住民の自主的な形が望ましく、地元の人たちで組織される委員会を設けるなど、地域の実情に応じた管理運営を行っている。

このように地域への定着をみてきている地区センターではあるが、増大する利用者に対応できないことや、施設の活用の方策等について、今後検討すべき課題がある。

図書館

図書館は住民要望の非常に強いものである。市では鉄道沿線別に八館を建設することを目標に整備を進めている。四九年に磯子図書館、五二年に山内図書館、五三年に戸塚図書館が完成している。現在、鶴見区、金沢区、港北区にそれぞれ整備中である。これら図書館の蔵書冊数は、昭和四九年には約二九万二千冊であったものが、昭和五十四年

には六一万四千冊と増大している。現在、貸出登録者数は、野毛の図書館も含め八万七千人であり、貸出冊数は五三年四月～五四年一月まで一二四万冊となっている。また、図書館から離れた地域の人びとに団体貸出を行つており、団体数は二九四、貸出冊数は二八万冊（五三年四月～五四年一月）である。団体貸出、個人貸出とも児童の利用が六十%を占めているのが特色となっている。

このように図書館整備によつて、市民要望にこたへつつあるが、市全域にわたる各図書館のシステム化、貸出事務の迅速化などが、今後の課題とされている。

体育館

余暇の拡大とともに、見るスポーツからするスポーツに変化するなかで、施設需要が増大している。このため文化体育館、平沼記念体育館では応えきれず、各区に地域体育館の建設を進め、自動車専用道路の高架下にスポーツ施設を整備したり、さらには小中学校の運動場の開放をも行っている。また、方面別体育館を整備する計画で、現在港南区日野町に建設が予定されている。地域体育館は、上記体育館が設置される区を除いて、原則として地区センターに併設して整備することになっており、地域的な需要に対応

していく。また高架下スポーツ施設については、港北区小机と旭区本村に五三年度に整備され、日常的なスポーツ活動に寄与している。

利用状況を見ると、磯子区地域体育館では一日平均利用者は約二五〇人（五二年十一月実績）で、利用申し込みに応じきれない状態となっている。階層別では主婦と小中学生の利用率が高いことが特色になっている。小机と本村の高架下スポーツ施設の利用状況についても、一日平均利用者は約百人（五三年八月実績）と利用率が高く、また小中学生、婦人の利用率が高いのが特色となっている。

●特色ある市民利用施設

最近整備された特色ある市民利用施設としては、港の見える丘公園の大佛次郎記念館、本牧ふ頭の手づり施設があげられる。

大佛次郎記念館は、横浜出身の作家大佛次郎氏の業績を記念したものであり、浦辺鎮太郎氏の設計によって大佛氏の人と作品のイメージがその建築に表現されている。五三年五月から五十四年一月末までに八万人を越える入場者があり、一日平均利用者は三七〇人を越え、予想を上まわ

る利用状況となっている。

海づり施設は本牧D突堤の沖に設けられたさん橋で、つり人・入場者を含め一日二百人〜二千三百人の入場者があり、休日には大変な混雑になっている。入場者の六五％は市内の人で、残りの三五％は市外からやってきており、こうした余暇施設に対する需要が強いことを示している。海づり施設運営会では、子供海づり教室などさまざまな行事によって市民に親しんでもらおうとしている。

大佛次郎記念館



海づり施設

